著作『反復』の成立

――キルケゴールの〈反復〉の思想　序説――

林　忠良

序

キルケゴールの仮名著作『反復』は、全体が仮名著者であるコンスタンティン・コンスタンティウスに帰せられるばかりでなく、[1] 叙述そのものも幾重にも重層化し、屈折錯綜して、その論旨がたやすくは辿りにくいものとされており、しばしばキルケゴールの仮名著作中でも最も謎に満ちた、厄介な著作であるともされる。

そのことは一面では、著者自身によって意図されたところでもあった（jf. SKS 4, 325 fn.; SV IV 322 fn.）。この書物の進行は「逆向きである」（SKS 4, 92; SV III 288）と言われたり、また後述する遺稿ハイベア駁論ではさらにはっきりと、「『反復』は気紛れに書きなぐった、取るに足らぬ、哲学的な素振りもない、おどけた小書であって、一風かわって、異端には理解できないように書かれた」（Pap. IV B 120, s. 306）とも言われる。[2]

キルケゴールの仮名著作が、独自の真理伝達論である〈間接伝達〉の問題と深く結びつき、それと表裏するものであることは周知のところで、そのことは当然に『反復』についても妥当する。『反復』を締め括る末尾のコンスタンティ

ンの書簡は「本書の真の読者に」(SKS 4, 89; SV III 285) と宛て書きされた封筒に収められるかたちにされているが、その書簡の書き出し部分で「よき読者たることは一つの技倆である」(SKS 4, 91; SV III 286) とされ、「著作家は、私見によれば、すべからくアレクサンドリアのクレメンスにならって、異端には理解できないように書くのがもっとも正しい」(ibid.) とも言われる。また「私の読者よ」という呼びかけで始まるある草稿には、「(『反復』) 全体は、冗談と真剣さとが入り混じった取るに足らぬもので、あなたに宛てて、できれば他の人間たちの注意は惹かぬように書いたものであった」(Pap. IV B 120, s. 306f.) とも言われる。これらを併せ見れば、『反復』の重畳錯綜する叙述形式は、第一義的には〈間接伝達〉を目指して構築されたものであることは明らかであろう。

その意味で『反復』全体は仮名著者たるコンスタンティン・コンスタンティウスに帰せられ、まずはその立場から解せられるべきものであって、それをそのままキルケゴール自身の体験や彼自身の立場の表明と解することは許されない。『後書』末尾の「最初にして最後の表明」(SKS 7, 569ff.; SV VII upagineret) でキルケゴール自身は、それまでの諸仮名著作の著者が自分であったことを公に表明した上で、しかし自分はそれらの著者たちを文学的に生み出した黒子にすぎないとして、「仮名著作のなかには私自身の言葉はただの一語もない」(SKS 7, 570; SV VII upagineret) とし、そして『おそれとおののき』について、自分はその著者たる沈黙のヨハンネスでもなければ、彼の描き出す信仰の騎士でもないとするが、同じことは『反復』についても言われなければならないはずで、彼自身は著者コンスタンティンでもなければ、主人公の青年でもなく、ましてヨブでもないのであり、それらを直ちにキルケゴール自身に直結させて解することは許されない。

とはいえ仮名著作のなかでわけてもこの両著作は、何らかのかたちで、彼自身の個人的体験をもっとも色濃く反映

しているものであることも疑えないところである。『反復』におけるコンスタンティンのベルリンへの旅の叙述は、キルケゴール自身のベルリン旅行と切り離しては考えられないし、またレギーネの婚約の報に接して『反復』の原草稿に施された全面的な改稿は、逆にその関連を裏面から傍証しているとも見られ得よう。[3] 間接伝達を目指す創作という性格と、こうした彼自身の個人的体験とのあいだの微妙な関係は、勢いその叙述に細心の熟慮と工夫を要求したはずで、そのことが『反復』の叙述にいっそうの錯綜をもたらし、晦渋さを加えることになったという一面も否定できないところであろう。

そのことと結びついてさらに考慮しなければならないのは、その叙述の重層化や錯綜には、『反復』という著作そのものの成立過程の問題も絡んでくるという点である。そしてその成立過程の問題は、この著作をどのように解するかということにも波及してくるので、『反復』を解釈するにあたっても、その成立過程を辿っておくことが必要不可欠なこととなる。

一　『反復』の成立過程

『反復』の成立過程の問題を本格的に問題にしたのはE・ヒルシュであった。[4] 彼はまず、ベルリン滞在中にキルケゴールが親友E・ベーセンに宛てた書簡（一八四三年五月二十五日付）のなかの「僕にとって重要な仕事を一つ仕上げて、全力で新しい仕事に取り組んでいる」[5]という言葉の検討から出発する。いくつかの傍証によってヒルシュは、それまでの通説に逆らって、ここで仕上げたとされているのは著作『反復』であり、新しく取り組んでいる仕事が著作『お

それとおののき』であると解し、それが七月中旬までに書かれ、七月末に『反復』の末尾部分が破棄され、まったく新たな結末が応急に補塡されたのだと推定した。そしてその改稿以前の『反復』の原草稿について、それはもともと「実りなき試み」(Pap. IV B 97, 1) という副題をもち、反復を求めたコンスタンティンの旅の失敗と、青年の発砲自殺に終わるものであったろうと推定する。しかしレギーネの婚約の報に接し、本来の執筆目的が失われたために、二月十七日付の青年の書簡第七信 (SKS 4, 81f.; SV III 276f.) に続く五葉 (一〇頁) の草稿が破棄されて、後続の末尾部分は、急遽まったく異なる結末に書き改められ、それに応じて先行部分にあった青年の「死」も「失踪」に改稿され、現在のテキストのかたちになったと推定する。しかしそれによってこの作品は毀損され、イロニーと冗談の権化たるコンスタンティンと悲劇的情熱的な青年とが、ともに反復に失敗するという原草稿の見事な対照は失われて、辻褄の合わない児戯的な結末に変更されたとした。

それに対してB・ヤンセンは、『反復』草稿が、前半部と後半部とでまったく異なる紙質紙型の用紙に書かれているという事実に着目して、ヒルシュとは異なる推定に達している。[6] 彼によれば、先述のベーセン宛書簡で完成したとされたのは、『反復』の現テキストの前半部、第一部のみであった。そしてそれはヒルシュの言う通り、同年五月ベルリン滞在中に執筆され、反復に絶望するという結末に終わるものであった。そしてそれと、着手していた新たな仕事とを携えて彼は帰国したのだとする。しかし次第にキルケゴールの内にヨブをめぐる想念が影響を与え、それがレギーネとの再結合への期待と結びついて、帰国後まったく異なる紙質紙型の用紙に、あらためて「反復」という標題を起こして第二部を書きはじめ、原草稿では死んだとされた青年を生き延びさせ、ヨブの生を辿り直させることによって、青年は奇跡を通じて結婚にふさわしい者に創りかえられて行くことが目指されていたと推定する。ところが同年七月

に思い設けぬレギーネの婚約の報に接し、そこで五葉の草稿が破棄されて、そこにコンスタンティンによる女性軽侮の註釈が続き、青年の最後の書簡第八信で、『反復』はまったく異なる結末で結ばれることになったのだとする。

原草稿の破棄された部分は現存せず、両者の異なる推定はともにどこまでも仮説に留まるもので、双方に対しては賛否両論の議論があり[7]、それは伝記的事実や作品内容にもかかわるが、ここではその議論の詳細に立入ることは避け、ひとまず筆者には目下もっとも説得的と思われる新版全集第四巻の註釈巻に収められたH・ブリッカーによる成立史研究[8]に主として拠りながら、『反復』の成立過程を簡単に辿っておくことにする。

『あれか――これか』の刊行（一八四三年二月二十日）ののち、キルケゴールは再度のベルリン旅行を企て、同年五月八日に出発した。当初長期の滞在も見込まれていたが[9]、予期に反しそこでの滞在は短期間で切り上げられ、すでに同年五月三十一日には帰国した。この旅行を促した動機として、直前の四月十六日のイースター礼拝でのレギーネの会釈が彼に惹き起こした動揺が指摘されるのがつねである。たしかにその出来事によって、「愛の反復」が可能であるか否かの問題が、彼にあらためて答えを迫るものとなったであろう。しかしそれとの関連でよく引かれる同年五月十七日ベルリンで書かれた日誌記述の「もし私が信仰をもっていたら、私はレギーネのもとに留まったであろう。ありがたいことに今やっとそれがわかった」（SKS 18, JJ: 115; Pap. IV A 107）という言葉は、単純な反省後悔の弁と解するわけには行かない。なぜならそれに続いて、「ここ数日私は気も狂わんばかりであった。人間的に言えば、私は彼女に対して正しかったのだ」と言われていて、そこからすれば、ここで「今やっとそれがわかった」と言われているのは、自分が間違っていたということよりも、むしろ自分がなしたことは今の自分になし得るかぎりでは正しい振舞であった、ということの洞察であったろうからである。いずれにせよこの出来事をそのまま直ちにベルリン旅行の動

機とすることには疑問が残る。ブリッカーは、ベルリンからベーセンに宛てたいくつかの書簡を援用しながら、この旅行は「一人の著作家が、新しい、しかしよく知ってもいる環境で、インスピレーションを得よう」[10]として企てたものだと推定している。

しかしいずれにせよ、この旅行の出立前後のキルケゴールにとって、かつて自分が取った行動が本当に正しかったのか否かという問いと結びついて、愛の反復という問題があらためて危急の問題として迫り、気も狂わんばかりであったと読むことは許されよう。その彼がベルリン到着直後に書いた五月十日の日誌（SKS 18, JJ: 109; Pap. IV A 101）には、その旅の途上で彼に深い印象を刻印した三つの出来事が書きとめられている。一つは旅の途中に宿泊したシュトラルズントで、少女がウェーバーの最後のワルツをピアノで弾いているのを聞いて狂いそうになったこと、その曲は前のベルリン旅行の際にティアガルテンではじめて迎えてくれた曲で、そのときには盲目の男が竪琴で演奏していたこと、二つ目は、前回には独身主義者であった薬局の主人に会ったが、その彼が今は結婚していて、しかも何のてらいもなく結婚を擁護したこと、三つ目は、前回と同じホテルに投宿し、同じ窓外の風景に眺め入り、同じ教会の鐘の音を聞いて、それが骨身にこたえたことである。そして彼は「すべてのことがただ私に思い起こさせる（minde sig）ためばかりのようだ」「あゝ、かつてのことが思い起こされる（indre om）」という感懐を洩らしている。この三つの出来事、これをブリッカーは〈デジャヴ体験〉と呼ぶが、あるものはくり返され、あるものはまったく変化を遂げてはいるものの、しかしそれらすべてがかつての時を思い起こさせるというこの体験が、彼に強烈な印象を与えたことは疑えないであろう。そしてその残映を『反復』のなかに辿ることは決して難しくはない。

たとえば竪琴弾きや薬局の主人はそのまま『反復』のなかに定着されている[11]。そして投宿したホテルで直後に書か

れたベーセン宛書簡には「今日私は仕事をしている……目下のところ、ふたたびたゆまぬ思想がはたらいて、ペンは私の手のなかで全開している」[12]と書かれ、五月十五日付書簡には「今や僕はふたたび浮かび上がった……僕のなかの機械装置はふたたびフル稼働している」と書かれて、盛んな創作意欲の再燃が告げられ、そして「僕が求めていたこと、それに一時間かかるか、一分ですむのか、それとも半年もかかるのかは僕にはわからなかったが、ある意味で僕はそこに到達した」として「一つの着想――一つの目くばせ――、知者にはそれで充分だ sat sapienti、さあ僕は攀じ登るのだ。その点ではすぐに帰国してもよいけれど、そうはしない。だけどもうベルリンより先へ行くのはやめる」[13]と書いている。これとほとんど同じ表現「私はふたたび私自身だ。機械装置は動き出した……すべては過ぎ去った、私の小舟は浮かび上がった」(SKS 4, 88; SV III 283) という言葉は、『反復』の主人公である青年が最後の第八信のなかで、自らの蘇生を言い表わす表現として用いられている。これらを併せ考えると、このベルリン旅行の当初の目的がブリッカーの言うように、転地によって著作家として新たなインスピレーションを求めるところにあったと断じ得るか否かは別として、ベルリンへの旅の途上でのこれらの体験の強烈な印象が、彼に一つの着想を与え、それが一挙に彼の創作意欲を再燃させ、およそ二週間という短いあいだに、一つの仕事となって完成したと推定することが許されるとすれば、そこで執筆され完成された仕事は『反復』であったと見るのが説得的であろう。

次に注目されるのは、『反復』原草稿では本文冒頭に付されていたが、のちに削除された「ベルリン、一八四三年五月」(Pap. IV B 97, 3) という日付である。この日付は、上述の推定による『反復』草稿の執筆時期とも契合するし、また懺悔祈祷日にコンスタンティンがベルリン到着したこと (SKS 4, 28; SV III 216) が一八四三年五月十日の懺悔祈祷日に合致することとも契合する[14]。ところが現テキスト末尾のコンスタンティンの「読者への手紙」は、「コペンハー

ゲン、一八四三年八月」（SKS 4, 91, SV III 287）の日付[15]をもつ。しかしその前に収められた青年の八つの書簡が第一信の八月十五日から第八信の五月三十一日まで、少なくとも年を越えて九カ月以上に亘ることから逆算すれば、原草稿の冒頭の日付はそれに適合し得なくなる。これらのことを考え併せると、原草稿の執筆当初の構想が、執筆の経過のなかで変更されたために、当初の日付が適合不能になって削除されたのだと推定される。

ではその構想の変更（および原草稿冒頭の地名と日付の削除）はどの時点で生じたのであろうか？　現テキスト第一部の叙述内容のうちには、原草稿冒頭の日付や地名と撞着する要素はない[16]。しかし第二部の核心部分をなしている青年の書簡になると、上述のようにそれが九カ月以上に及ぶ以上、当初の日付は絶対的に両立不能となる。このことと先述した第一部と第二部との草稿用紙の大きな差異や、五月二十五日付書簡の伝えるように、そのときすでに『おそれとおののき』と推察される新しい仕事に取りかかっていることなどを考え併せると、五月にベルリンで執筆され、仕上ったと考えられたのは、『反復』の第一部であったと推定することが少なくとも可能である。さらに第二部の書簡第一信のなかで、青年はSchack Staffeldtの詩の一節を引用するが（SKS 4, 64; SV III 256）、それはおそらく同年に刊行された『Staffeldt全詩集』を読み、日誌にNBと註記して書き留めているもの（SKS 18, JJ: 125; Pap. IV A 118）を書き写したと考えるのが妥当である。その日誌記述に日付はないが、先引の五月十七日の記述（SKS 18, JJ: 115; Pap. IV A 107）よりもあとに書かれていることから、それが日誌に書き留められたのは、おそらく旅宿においてよりも、帰国後であったと見られよう[17]。そこからすれば『反復』第二部の少なくとも第一信以降は、帰国後の六月以降にコペンハーゲンで執筆されたこととなる。この推定が正しいとすれば、『反復』はその時点で構成し直され、青年は生き延び、ヨブのあとを辿るという青年の書簡を核とする第二部が構想され、そしてそれに応じて第一部の青年

の「死」は「失踪」に改稿され（jf. SKS 4, 22f.; SV III 208f.）、冒頭の日付も削除されることになったと推定することが可能となる。

第二部の書簡では、青年が『ヨブ記』を情熱的実存的に読み直して行く過程が進行して行くが、二月十七日付の第七信をもってその流れは突然に中断される。そこにコンスタンティンの註釈が割り込んで、そのあとに第八信が続くことになるが、しかしその内容は、それまでの叙述の流れとは充分に有機的には繋がらず、きわめて唐突の観を与える結末となる。すでに述べたように第七信の直後で、草稿の五葉（一〇頁）が破り取られ破棄され、新たに書き改められて、現テキストのかたちになったのであるが、この改変が同年七月にレギーネのシュレーゲルとの婚約の報に接したことに起因するとされるのは、ヒルシュ以来根本的に変わることはない。したがってコンスタンティンの註釈と五月三十一日付の第八信とは、レギーネの婚約の報に接したのちの七月以降になって執筆されたことになる。

そして末尾には、「本書の真の読者に」という宛書の封筒のあとに、コンスタンティンの書簡が続いて現テキストは結ばれる。この書簡の冒頭に付されている「コペンハーゲン、一八四三年八月」（SKS 4, 91; SV III 287）は、もともと「一八四三年七月」（Pap. IV B 97, 30）とあったものが改稿されたもので、この原草稿の日付を遺稿集第二版編集者は、キルケゴールがレギーネの婚約の報に接した時点と同定するが（Pap. IV XX）、そのことの正否はともかくとして、原草稿の一八四三年七月という日付は、この書簡の執筆時期を暗に示していると見ることもできよう。

以上の推定が許されるとすれば、『反復』の少なくとも末尾部分は七月以降に成立したもので、それは『おそれとおののき』後に書かれた。コンスタンティン書簡の青年評の「もし彼がもっと深い宗教的な背景をもっていたとしたら……すべては宗教的な意味をもったことだろう……彼は自分が初めからしてきたこと、その結果としてなさざるを得

なかったことを、おそれとおののきをもって、しかし同時に信仰と信頼をもって理解するだろう」(SKS 4, 95; SV III 292 傍点筆者) という言葉は、明らかに『おそれとおののき』を前提している。しかしさらに上述のように『反復』の第二部そのものが、六月の帰国後に執筆されたとする推定も可能である。『おそれとおののき』の執筆が五月末にベルリンで始まり、帰国後もそれが書きつづけられたと見るのが妥当だとすれば、『反復』の第二部はその『おそれとおののき』の後に書かれたとする推定も成り立つ。そしてこのことは『反復』の内容をどう見るかとも深くかかわることとなる。[18]

E・ヒルシュは、『反復』の結末に如実に現われているような、レギーネの婚約がもたらした衝撃は、それまでのキルケゴールの著作活動における詩的なものとキリスト教的—宗教的なものとの融合の上昇的発展という試みに根本的な挫折をもたらし、そこにキルケゴールの著作活動における大きな転回点があるとし、その転換の始まりをその年の秋以降の『建徳的講話』に見ている。[19] 筆者はヒルシュのように、青年の第八信の結末を「辻褄の合わない児戯的な結末」とは考えず、むしろそこにこそキルケゴール自身を直撃した真の〈雷雨〉の残響があると解する。

『反復』の成立過程を以上のように辿ることが許されるとすれば、著作『反復』はベルリンへの旅の途上でその最初の着想を得て、ベルリンで精力的に一気呵成に執筆され、青年の死とコンスタンティンの絶望に終わる結末の物語として書き上げられ、一旦はそれで仕上ったものと考えられた。しかし帰国後の六月以降に、その構想は根本的に変更され、青年は生き延びて書簡の書き手として第二部を構成することになった。しかしさらに七月になってレギーネの婚約の報に接して、その最後の部分が破棄され、根本的に改稿されて、現テキストのかたちになったと推定することが可能である。

二　『反復』の源流（一）
――『あれか――これか』との関係――

『反復』と先行著作『あれか――これか』との関係に関しては、『反復』のなかに『あれか――これか』に直接するものを求めても、明示的にはわずかに、かつて独身主義を弁じた薬局の主人が一変して「結婚の美的妥当性」（SKS 4, 28; SV III 216）を証明するくだりが、『あれか――これか』第二部のヴィルヘルムの「結婚の美的妥当性」論を連想させるほかには、「想起の愛がただ一つの幸福な愛である、とある作家は言っている」（SKS 4, 11; SV III 194）と、『あれか――これか』第一部〈ディアプサルマタ〉の一節「想起の愛にしてはじめて幸福である」（SKS 2, 50; SV I 28）が言及されるのみである。逆に『あれか――これか』に〈反復 Gjentagelse〉という言葉を探しても、後述するヴィルヘルムの立場で〈反復〉が問題とされる場合のように、そこに間接的には『反復』との隠れた連関を辿り得る用例もあるとはいえ、未だ「新しいカテゴリー」（SKS 4, 25; SV III 211）としての〈反復〉の概念を明示するものは見出せず、多くはたんなる「くり返し」の意に留まる。[20] しかしながら、このヴィルヘルムの立場だけでなく、前出の『あれか――これか』からの唯一の引用が〈想起〉を語り、後述のようにその〈想起 Erindring〉は『あれか――これか』でくり返し問われる問題であること、他方『反復』において〈反復〉の概念は冒頭からその〈想起〉の概念との対峙において引き出され、展開されることからすれば、『あれか――これか』のなかに、伏流しつつ『反復』へと流れ入る思想的源流を見なければならないであろう。

前節で述べたように、いくつかの理由が重なり合って『反復』の叙述は錯綜している。そのことも手伝って『反復』

は、当代を代表する批評家J・L・ハイベアによる的外れの紹介批評を受ける羽目に陥り、それに対してキルケゴールは詳細な駁論を起稿し、幾通りもの改稿も試みる。[21] 結局それは草稿のまま出版されることなく終わり、わずかに『不安の概念』の註（SKS 4, 326f. fn.; SV IV 322f. fn.）などに断片的に用いられるに留まった。だがこの駁論草稿によって、彼は『反復』の本来の意図をいわば舞台裏から照らし出すことになったが、そのなかで彼は『あれか――これか』第一部の「輪作」論にも言及し、それと『反復』とのかかわりを示唆している（Pap. IV B 117, s. 281）。

その駁論において彼は、『反復』で問われた問題は、ハイベアが解するような自然の領域での反復でもなければ、世界史の領域での反復でもなくて、自由な精神として規定される個人における〈反復〉の問題であったのだとする。そしてそのように〈反復〉という概念が個人の自由の領域で用いられるとき、その自由が自己自身に達するのには多くの段階を経過することに即応して、〈反復〉の概念も歴史をもつことになるとする。[22] (a)自由はまず快楽として、もしくは快楽において規定される。しかしその快楽は何よりも反復を恐れる。だがいかに快楽に工夫をこらしても、反復は姿を現わし、かくして快楽における自由は絶望に陥る。そこで自由は新たにより高い形式で現われる。(b)それが賢明さとして規定される自由である。そこでは反復の存在は承認されながらも、しかもその反復から不断に新しい面を引き摺り出す賢明さに自由が求められる。そしてこの賢明さにおける自由という段階が『あれか――これか』の「輪作」論に表現されているものだとする。しかし賢明さによって反復を欺いて別のものに変じてみても、そこにふたたび反復は現われ、賢明さも絶望に帰着する。(c)そこに、それ自身との関係において規定された最高形式の自由が破開する。そしてそこで一切の逆転が生じて、「今や自由の最高の関心はほかならぬ反復をもたらすこと」(Pap. IV B 117, s. 282)となり、そして問題はほかならぬ「反復は可能であるか」(ibid.) という問いに一変するとされる。そして『反復』で

提示せんとしたのはこの(c)の意味における〈反復〉であったのだとされる。

この図式に即して言えば、ここで(a)と(b)として捉えられたあり方は、『あれか――これか』の第一部で描かれている〈美的生〉である。キルケゴールにおいて〈美的なもの〉とは αἴσθησις（感覚）に近い意味をとどめつつ〈直接性〉を意味し、したがって〈美的に生きる〉とは、直接性において、それによって、それから生きる、〈享受〉を生きる原理とするあり方である。しかし享受が真に享受であるためには、それはつねに新鮮でなければならぬ。美的に生きんとする者は、あらゆる固定化を排して、一切の囚われから解き放たれて自由に直接性を享受することを求めて、不断の新鮮さを要求する。「退屈が一切のわざわいの根である」（SKS 2, 275; SV I 297）。このように美的生は自らを絶えざる浮遊状態に維持しつつ、瞬間のきらめきを求める瞬時性を有する。そしてその瞬間は不断に汲み尽くされて没落し、その没落のあとにはまた別の新たなる瞬間が求められる。このような美的生にとっては、〈反復〉はまさしく自己の死をもたらすものにほかならない。このようにいわば次々と耕地を交替することに限りない変化を見出し、そこに快楽・享受としての自由を求めつつ、〈反復〉を拒否しようとするのが、ドン・ファンによって代表されるようなあり方である。しかし『あれか――これか』の「輪作」論において、それは外延的次元における転作であり、悪しき無限性に終わるとされ、それによっては〈反復〉は根絶され得ず、絶望に終わるほかはないとされる。そしてそれに対して、耕地を交替する外延的変化によってではなく、同一の土地に限局されながらも、耕作方法や作物種類の交替によって、そこに不断の変化を生み出す本来の〈輪作〉が提起される。反復が厳存する現実は承認されながらも、その反復のなかに絶えず新たな面を見出して行く〈賢明さ〉によって変化を生み出し、それを享受するところに自由を求めようとする。そしてむしろ「制限の原理」がかえってより多くの「案出力」を生むとされる（SKS 2, 281; SV I 305）。直接

的に次々と別の女性を誘惑する外延的な誘惑者たるドン・ファンに対して、ただ一人の少女をさまざまに享受し尽くす集中的、内包的な誘惑者たる誘惑者ヨハンネスは、策略のかぎりを尽くしてそれを享受する反省的誘惑者である。

それに対して(c)で指示されるあり方は、『あれか――これか』第二部の判事ヴィルヘルムの立場において始まり、さまざまな道程を経ながら、のちに『死に至る病』において「自己自身に関係する関係、それが自由である。自己とは自由である」(SKS 11, 145; SV XI 160) と言われるまでに至るような、倫理的―宗教的あり方において問い求められて行く自由である。あらゆる固定化や囚われから解き放たれた浮遊状態に自らを持して生きんとする自由は、ヴィルヘルムからすれば、時間性から逃避した夢遊病者の強さに過ぎず、あれやこれやを選び択ることはあっても、何ものも真に自らのものとして選び択ることのない、可能性への惑溺にほかならないと断ぜられる。それに対して彼は、そのように瞬間瞬間に、あれこれを選び択る「美的選択」にではなく、そこで自己自身を選び択り、受け取り、自己自身になることに真の自由のありかを求める (SKS 3, 163, 173; SV II 181, 192)。あれこれの可能性を選び択ることを拒否して、むしろ自己自身を選び択るところに真の「絶対的選択」(SKS 3, 173; SV II 192) が成り立ち、それによって真の課題が生まれ、倫理的なものが定立される。きらめきの瞬間瞬間への集中に永遠を見る「初恋」に対し、「結婚愛」は時間の持続のなかに永遠を保持せんとするように、倫理的な生は「征服の瞬間」ではなく「持続的所有」を目指す。そしてその持続的所有は決して「死せる所有物」の持続ではなく、不断に反復される「不断の獲得」にほかならない (SKS 3, 136; SV II 150f.)。それによって自己は、時間のなかに留まりつつ、その時間にうち克ち、永遠性を獲得する。そして「永遠性に生きながら、しかも居間の時計の打つ音を聞いているという大いなる謎を解くのだ」(SKS 3, 137; SV II 151) とされる。そして外的媒体のなかを動いている初恋がつねに曝されざるを得ない懐疑から結婚愛

が護られているように、この倫理的な選択によってはじめて自己は、外的条件に結ばれ、それに依拠するがゆえの美的選択の相対性を脱して、人格的統一性、連続性、永遠性を獲得するのだとされる。そうなると美的生にとっては自己の死を意味した〈反復〉こそが、倫理的生にとってはそこに生命を見出すものとなる。したがってここに至って、反復こそ求められるべきものとなり、自由の最大の関心はほかならぬ反復を実現することとなる。

こうした『あれか――これか』第二部のヴィルヘルムの立場は、ある面では『反復』のコンスタンティン・コンスタンティウスによって引き継がれていると見ることもできる。『反復』の冒頭部分で、コンスタンティンが「想起の愛」との対照において「反復の愛」を語り、それを「着古されていない着物」、「祝福をもって充ち足らせる日毎の糧」などという比喩でそれを表現するところなどを見れば（SKS 4, 10; SV III 194）、その立場はヴィルヘルムの立場にきわめて近接した面をもつと言えよう。[23] しかしそこであらためて、ではそうした反復は果たして可能であるのかどうかが問われることになる。かくして「反復は可能であるか、それはいかなる意義を有するか、物事は反復されることによって得るところがあるのか、それとも何かを失うのか」（SKS 4, 9; SV III 193）という問いが『反復』の冒頭に立てられ、そしてその問いが『反復』の主題となるのである。

「反復は可能であるか」という問いは、すでにヴィルヘルム自身にあっても、隠れたかたちでは存在するとも言える。結婚愛に公開性を厳しく要求する彼は、公開し得ない秘密を身に帯びた者はそこから排除する。その一方で彼は最終的には、普遍的なものを実現し倫理的に生きることから締め出された〈例外者〉が存在することを認めざるを得ない。しかしながら彼は、かかる例外者は、普遍的なものから締め出されてある自己に対する深い悲嘆を通じて、かえって普遍人間的なものを証言し、それと和解しているのだとするに留まり（SKS 3, 312f.; SV II 356）、そのことそのもの

を問題として受け止め、さらに追求するには至らない。『反復』の主人公の青年は、まさにその〈例外者〉の問題をほかならぬ自分自身の問題として負い、それと苦闘しながら生きて、その解決を求める。そしてコンスタンティンの読者への書簡において、その問題はカテゴリー化される（SKS 4, 92f.; SV III 288ff.）。『おそれとおののき』においてその問題はさらに引き絞られることになるが、『あれか――これか』第二部のヴィルヘルムにおいては、その問題は予感されながらも、本質的には回避されていると言えよう。

逆にその問題は、ある点からすれば、むしろ『あれか――これか』の第一部において問題化されているとも言える。そのなかの「古代の悲劇的なものの現代の悲劇的なものへの反映」論で改作される〈現代のアンティゴネー〉は、自らの内に開示し得ぬ秘密を抱えたままに沈黙し、悲嘆は内面化し反省的なものと化し、彼女は普遍人間的なものから締め出され、生きていながら、ある意味では死んでいる。これもふくめ、続く「影絵」論、「最も不幸な者」論はすべて、Συμπροαναιρούμενοι（ともに死せる者たち）仲間に向けて語られる。「影絵」論に登場するマリー・ボーマルシェも、ドンナ・エルヴィーラも、マルグレーテも、恋人に捨てられ、かつての直接性の幸福を奪い去られて、今はただそれを想起しつつ、その想起のうちに無限の反省をくり返すばかりの不幸な存在、G・マランツクの言を借りれば、「外的な運命もしくは力によって最初の直接性を打ち砕かれ」「想起のなかに生きることを余儀なくされている不幸な存在」である。[24]「影絵」論のモットーとして用いられているレッシングからの引用「昨日は愛した／今日は苦しむ／明日は死ぬ。それでも私が想うのは／今日も明日も／とかく昨日のこと」（SKS 2, 164; SV I 166）は、雄弁に彼女らの想いを代弁する。そして「最も不幸な者」論では、ヘーゲルの〈不幸な意識〉論にふれて、「さて不幸な者とは、自らの理想、生の内実、意識の充実、本来の本質を、何らかの仕方で自らの外にもつ者である。不幸な者はつねに自己自

身に不在で、決して自己自身に現在的（nærværende）ではない。そして人が不在であり得るのは明らかに、過去の時にあるか、それとも未来の時にあるかのいずれかである」（SKS 2, 216; SV I 226f.）と言えば、これで〈不幸な意識〉の全領域は包括されるだろうが、離隔の場から考察する哲学者ではなくて、そこに生まれ、そこに生きる人間として、その問題がいっそう深く人間の実存に食い入ってくると、「人がその希望において現在的（præsentisk）になることを妨げるものが想起で、人が想起において現在的になるのを妨げるものが希望」になり、そして「想起さるべきものをつねに希望し」、「希望すべきものをつねに想起する」（SKS 2, 218; SV I 229）こととともなり、そこにこそ「最も不幸な者」は見出されるとされる。[25]『反復』の青年の陥った苦境もまさにそのことにかかわっている。そこで直接性への立ち戻りは果たして可能であるのか、ひいては「反復は可能であるのか」という問いが、抜き差しならぬ問いとして立ち現われる。

先述のディアプサルマタからの引用に見るように、著作『反復』はまさしくこうした問題を引き受けつつ、〈反復〉は可能であるかという問いが、〈想起〉と密接にかかわりつつ立てられるというかたちで始まり、問われて行くのである。もちろんそれが主人公の青年の抱懐する問題そのものであることは一読して自明であるが、しかしより以上にまた著者たるコンスタンティン・コンスタンティウス自身も、〈反復〉を唱えながらも実は同じ問題に突き当たっていることは、〈反復〉を求めたはずのベルリンへの彼の旅が、現実には〈想起〉の旅にほかならぬものであったこと、とりわけ前回のベルリン滞在での笑劇の観劇を想起する場面の描写で、前回の観劇のさなかに、夜の小川の流れが乳母であった自らの幼時を、自分が想起したことを、さらにあらためて想起しているところ（SKS 4, 40; SV III 229f.）などを見れば、そのことは明らかである。[26]

三　『反復』の源流（二）
――「ヨハンネス・クリマクス遺稿」との関係――

しかしながら前述のように、カテゴリーとして捉えられるような〈反復〉は『あれか――これか』には未だ見出されず、〈反復〉という概念がカテゴリー化されて初めて現われたのは、『あれか――これか』擱筆後に着手されながら中断され、そのまま未完に終わった遺稿『ヨハンネス・クリマクス――あるいは――すべてのもの疑わるべし』（Pap. IV B 1）の末尾においてであった。この遺稿の執筆は、一八四二年十一月十一日に『あれか――これか』の執筆を終えてのち、翌一八四三年四月ごろまでなされたとされる。[27] しかしその執筆を中断したまま、キルケゴールは同年五月八日にはベルリンへ旅立ち、既述のようにそこで『反復』初稿を脱稿し、そのまま引続き『おそれとおののき』の執筆に取りかかる。このような経過のなかでこの遺稿は未完のままに残されることとなった。そしてこの遺稿が中断される直前のところで、突然に〈反復〉という概念が登場して、「観念性 Idealitet と実在性 Realitet とが触れ合うとき、反復が現われる」（Pap. IV B 1, s. 151）と語られる。

この遺稿は「一つの物語」という副題をもち、ヨハンネス・クリマクスという名の一人の若者の思想の歩みを辿る物語のかたちで展開するが、当初の意図では、主人公が自らの語るところに誠実に生きようとして、やがて座礁して行く姿を追い（Pap. IV B 16）、それを通じて、「すべてのもの疑わるべし de omnibus dubitandum est」という懐疑こそが哲学の始元もしくは前提であると自明のごとくに公言しながらも、自らはそれを行おうともしない近時の哲学の不真実を暴き、その不真実によってはじめて可能となる哲学の混乱、すなわち冬と春と真夏のように共在し得ない

ものが一緒くたにされている混乱を糾そうとするところにあった（Pap. IV B 1, s. 104）。

しかし「すべてのもの疑わるべし」とする命題は、自らそれを行うことなしには提起され得ないと同時に、その命題を受容するにしても、そもそも〈懐疑〉はその本質からして先行するものとの断絶をはらむものである以上、この命題もその否定性のゆえに、いかなる直接的伝達も直接的受容もあり得ない命題のはずである。したがってこの命題は、各人がその語るところを自ら行い自得する仕方でしか受け取られ得ないものである。そこでヨハンネスはこの命題を自分自身の身上において自ら考え抜こうとするところが第二部で描かれることになるが、その第一章で彼は「懐疑するとはどういうことか」を問おうとする。そしてまずその冒頭で「懐疑することが可能になるには、実存（存在）はいかなる性質のものでなければならないか」（ibid., s. 144）という問いを立てて、「意識における懐疑の理念的可能性」（ibid., s. 145）を問おうとする。つまりそもそも懐疑というものが喚び起こされ得るのは、意識のどういうあり方なのかを問おうとする。その議論の展開の中途で稿は突然に中断され、そしてそこで未完のまま遺稿として残されることとなるのである。

彼はまず懐疑していない状態、懐疑を克服したのではなく未だ懐疑に至らない状態、つまり「意識が懐疑を自分の外にもつ」という場合、意識はどういう状態にあるのかを問う。そのとき意識は未だ自らを自覚せず、まったく無規定のままに直接的にある。「直接性は無規定性にほかならない」（ibid.）。そこには意識するものも意識されるものもなく、意識はその瞬間に没入し、そこにはいかなる関係も規定も未だ存在しないから、すべては真であるが、その真は次の瞬間には真ではなくなる。そこでは真理という問題も懐疑という問題も存在しない。その意識が他との関係にもたらされるとき、その間接性によって直接性は止揚され、そしてそこではじめて真理への問いが、非真理への問いと

一つに現われ出る。

この直接性と、それを前提すると同時に止揚する間接性をさらに内実的に規定して、「ではその直接性とは何か。それは実在性 Realitet である。間接性とは何か。それは言葉 Ord である」(ibid., s. 146) と言われ、そして「実在性は時間空間において規定される個々のものを提示するのに対して、観念性 Idealitet は普遍的なものを提示する」(Pap. IV B 10, 7) とも言われる。直接性を止揚するのは言葉 Sprog であり、もし人間が語ることができなかったとしたら、人間は直接性に留まり続けたことであろうとも言われる (jf. Pap. IV B 14, 6)。しかし言葉は理念的なものであるから、直接性を言葉で言い表わそうとするや否や、そこには矛盾が生じる。そこで私の語るものは、私が語ろうとするものとはまったく別のものだからである。かくして「直接性は実在性であり、言葉は理念性であり、私が語ることによって、私は矛盾を招来する」(Pap. IV B 1, s. 146) ことになる。このように二重性から生み出され、またそれを自ら生み出す、矛盾を本質とする意識のなかに、懐疑の可能性が胚胎するのだとされる。

矛盾を本質とする意識の「もっとも単純な事例」として、「知覚 Sandsning のうちに一つの反復を見ようとすると、そこに矛盾が生じる」(Pap. IV B 12) と言われ、「直接性と間接性との関係の最初の表現は反復である」(Pap. IV B 10, 8) とされる。直接性においてある実在性はもっぱらその時々の瞬間においてあるのであって、そこで反復を語ることはできない。「実在性そのものにはいかなる反復も存在しない」(Pap. IV B 1, s. 149)。さりとて理念は同一であり続けるものであるから、そこでも反復を語ることはできない。「観念性しか存しないところではいかなる反復も存在しない」(ibid., s. 150)。かくして「観念性と実在性とが触れ合うとき、反復が現われ」(前出)、そしてそこに矛盾が生じるのだとされる。そしてその問題がここではとくに「意識における反復、したがって想起」(ibid.) をめぐってい

るとされて、「想起は同じ矛盾を有する。想起は観念性ではなく、かつてあったところの観念性である。それは実在性ではなく、かつてあったところの実在性である。これもまた二重の矛盾である。なぜなら観念性はその概念からすれば、かつてあったということはあり得ないし、実在性もその概念からすれば、かつてあったということはあり得ないからである」(ibid.) と述べられたところで、この遺稿は中断されたまま未完に終わることとなる。

こうした直接性と言葉、個別と普遍をめぐる問題は、すでに『あれか――これか』のモーツァルト論において、言葉と音楽との境界をめぐって論じられた問題でもあるが (jf. SKS 2, 60, 99f.; SV I 76, 89)、こうした議論がヘーゲルの『精神現象学』の「感覚的確信」をめぐる議論に密接に結びついていることは見易いところである。現にこの未完遺稿のある註でも (Pap. IV B 1, s. 147)、近時の哲学の用語は往々にして紛らわしいとし、感性的意識、知覚的意識、悟性などと語られるのは、むしろ知覚、経験と呼ばれるべきである、なぜなら意識にはそれ以上のものがあるからだと批評されるが[28]、これらが『精神現象学』の「意識」の章の「感覚的確信」「知覚」「悟性」の叙述を踏まえたものであることは明らかである[29]。

こうした事実からさらに踏み込んで、J・スチュアートは、『精神現象学』の「感覚的確信」の分析こそがキルケゴールの〈反復〉概念の源泉だとする主張を展開している[30]。彼は「感覚的確信」をめぐるヘーゲルの叙述とヨハンネス・クリマクス遺稿の叙述とが酷似し重なり合う点としてとりわけ、(1)ヘーゲルの用語〈普遍性〉〈特殊性〉とキルケゴールの用語〈観念性〉〈実在性〉との概念的類縁性、(2)三複対的 triadisch 論証形式、(3)意識の矛盾としての反復の概念、という三つの点を指摘する[31]。ヘーゲルが思念された個別者を言葉という普遍的カテゴリーで表現することの不可能を語り、「思念されている感覚的なこれは、それ自体普遍的なものである意識に帰属する言葉には、到達し得ないもので

ある[32]」などと述べているところで、彼が語る対象の〈特殊性〉とはキルケゴールが〈実在性〉と呼ぶものであり、それを規定し表現する言葉の〈普遍性〉はキルケゴールが〈観念性〉と呼ぶものにほかならないとして、ヘーゲルの〈普遍性〉〈特殊性〉の区別と、キルケゴールの〈観念性〉〈実在性〉の区別との概念的類縁性を指摘する。その上でさらにキルケゴールはヘーゲルの論証形式をも踏襲しているとされる。感覚的確信の分析においてヘーゲルは、まず真理を対象の特殊性に見る捉え方を取り上げ、その矛盾を明らかにした上で、次いで逆に真理を主観の思惟に見る見方を取り上げてその矛盾を明らかにし、そして最後に真理を客観と主観との統一に見ようとする立場を批判的に取り上げる。スチュアートによれば、キルケゴールの論証も同じ形式に則り、まず実在性のみの枠内では反復は存在しないとし、次に観念性のみの枠内でも反復は存在しないとして、最後に反復は両者の統一のなかに生ずるという三複対的論証形式を用いているとする。その上で彼は、キルケゴールにおける実在性と観念性、ヘーゲルにおける特殊性と普遍性を統一する〈矛盾としての意識〉という捉え方における両者の類縁性を指摘する。「意識は一面で対象の意識であり、他面で自己自身の意識である。自らにとって真であるものの意識であり、またそれについての自らの知の意識である。両者が同じ意識に対してあるから、意識自身が両者の比較となる。同じ意識に対して、対象の知が対象と一致しているか否かの問いが生まれる[33]」。概念と対象とが意識において統一されるところで両者が一致しているか否かの吟味がなされ、そこに生じる矛盾が意識を新たな経験へと陶冶して行くところに、意識の経験の道程を辿る現象学的方法はある。こうしたヘーゲルの意識の分析と、先述の二重性から生み出され、自ら二重性を生み出す矛盾を本質とする〈意識〉のなかに〈懐疑〉の理念的可能性を見出すヨハンネス・クリマクス遺稿の意識の把握とは契合しており、〈反復〉を意識の矛盾であると主張するとき、「彼は〈感覚的確信〉の節のヘーゲルのテーゼを再現しているのである」とし、

そこにキルケゴールの「反復概念の認識論的基盤」を見ようとするのである。[34]

このようにスチュアートは、『反復』においてはヘーゲルの〈媒介〉概念に対置されることになる〈反復〉概念が、この遺稿においてはむしろそのヘーゲルの意識の議論の文脈から生まれていると主張するのであるが、同時に両者のあいだにある差異も指摘している。彼によれば、キルケゴールはここでの、意識は特殊的なものを思念しながら、しかし普遍的なものしか語り得ない矛盾に陥るという結末からやがて、アブラハムは語り得ない、その信仰は言葉で表現し論証をもって基礎づけ得ないとして、言葉の限界と、言葉と信仰との非通約性を浮き彫りにし、そこからさらに間接伝達の主張を導出する方向へと展開して行くのだとする。それに対してヘーゲルにおいては、「感覚的確信」は絶対知に至る長い道程の最初の分析に過ぎず、その矛盾分裂は新たな経験を生み、そうした過程を次々と通り抜けて、普遍と特殊、主観と客観との最終的媒介を絶対知において見出す、そういう道程のなかの一つの知の形式に過ぎない。それゆえ「ヘーゲルにとって〈感覚的確信〉は、止揚されねばならぬ矛盾をはらんだ知の諸形式のなかの一つをなすに過ぎない。それに対してキルケゴールにとっては〈感覚的確信〉のアポリアは最後の言葉である。そこにある言葉と現実との非通約性の主張は、必要な変更を加えれば muntatis muntandis、彼の最終的な立場をなすものである」[35]と結論し、このようにキルケゴールは、ヘーゲル哲学のある観点を取り上げて展開し、さらにはそれを利用しながらも、それをもってその哲学の他の観点を批判して行くのだとする。このようにしてキルケゴールの〈反復〉概念は、ヘーゲルの〈感覚的確信〉の議論の文脈から生まれたものだと結論する。

こうしたスチュアートの主張は、未完遺稿の第二部第一章第一節のみの分析に基づくが[36]、上述のように未完遺稿のこの部分の叙述が、『精神現象学』の「感覚的確信」の分析と深く結びついていることは明らかである。しかしながら

それをもって、そのヘーゲルの分析を、キルケゴールの〈反復〉概念の「認識論的基盤」とすることができるかどうかは疑問である。なぜならこのスチュアートの議論には、未完遺稿の重要な点が等閑視されていることも疑えないところだからである。すぐに気づかされる点は、彼の分析は彼自身も言う通り、未完遺稿の第二部第一章第一節（中断個所まで）のみの分析であって、それも未完遺稿全体の枠組とは完全に切り離されてなされた分析に過ぎない点である。遺稿本文はここで中断されて未完となるが、草稿に見る当初の構想は、さらに第二節「それ（懐疑）は認識の行為であるか」(Pap. IV B 13, 5)、第三節「それは意志の行為であるか」(Pap. IV B 13, 9) と続き、そして第二章 (Pap. IV B 13, 11)、第三章 (Pap. IV 13, 14)、第四章 (Pap. IV B 13, 15)、さらに第三部 (Pap. IV B 13, 16) も考えられていた。そして当初「それは認識の行為であるか」が第一章の第一節に、「それは意志の行為であるか」は第二節に配されていたが、それらに先立って第一節が立てられることになって (Pap. IV B 13, 4)、それらはそれぞれ第二節、第三節に送られることになった。スチュアートはこの第一節のみ（中断部分まで）を分析対象としている。ところが第二節「それは認識の行為であるか」では、〈無知〉における懐疑の存在が否定されるとともに、さらに〈懐疑〉は関係即関心において生起する点でたんなる〈不確かさ〉とも異なるとされ (Pap. IV B 10, 18)、アリストテレスやデカルトなどを援用しながら、直接的な〈知覚〉や〈認識〉が人を欺くことはあり得ないとされ (Pap. IV B 13: 7, 8, 22)、続く第三節「それは意志の行為であるか」では、「懐疑には意志の行為があるにちがいない……でなければ疑うことは不確かであることと同じことになってしまうだろう」(Pap. IV B 5, 8) とし、さらに「疑うためには、人はそれを意志しなければならない――それをやめるのであれば、意志の契機が取り去られねばならない――人はそれを意志しなければならない。したがって懐疑は決して認識によっては克服されない」(Pap. IV B 5, 13) とする論旨

の展開が構想されていた。

周知のごとくこれらの論点は、のちに『哲学的断片』の「間奏曲」(SKS 4, 272ff.; SV IV 273ff.)、とりわけ「過去のものの把握」の節で論じられることとなる。そこでも「直接的知覚や直接的認識が欺くことはあり得ない」(SKS 4, 280, 281; SV IV 273, 274) と言われ、ギリシャの懐疑家たちも感覚や直接的認識の正しさを否定したわけではなく、「誤謬はまったく別の根拠から、私が (そこから) 引き出す推論から生ずるのだ」(SKS 4, 281; SV IV 274) と考え、その推論を止めることさえできれば、決して欺かれることはないとして、その手前で自らをつねに宙吊りの状態に留め、判断を差し控える判断停止 (εποχη) によって、平静 (αταραξια) を得ることを彼らは目指した。それゆえ「彼らは疑うことを意志した」のであり、「彼らが懐疑したのは認識によってではなく、(同意を拒む) 意志によってであった」(ibid.) とされるが、そのことは逆にまた「かかる懐疑は自由によって、意志の行為によってしか廃絶されない」(ibid.) ということでもある。そしてこうした〈懐疑〉の捉え方こそが、歴史的なものの「生成に対する感覚」(SKS 4, 283; SV IV 276) である〈信仰〉の本質に光を投ずるものであるとされるのである。

ヨハンネス・クリマクス遺稿は、その構想段階において、すでにこうした方向性をはらむものであった。『哲学的断片』間奏曲で「ギリシャの懐疑主義は撤退的 retirerende (εποχη) であった」(SKS 4, 281; SV IV 274) と言われるのとまったく同じ理解が、すでに遺稿草稿において「審問する懐疑 den inquirerende Tvivl」に対する「撤退する懐疑 den retirerende Tvivl」として書き留められているし (Pap. IV B 13, 21)、遺稿本文でも、ギリシャの懐疑家たちの態度の方が、懐疑を体系でもって制圧しようとする近時の哲学よりもはるかに筋が通っているとして、「彼らは懐疑が関心の内に胚胎することをよく見抜いていたから、きわめて当然に、関心をアパテイアに変えることで懐疑を廃そ

うと考えた」(Pap. IV B 1, s. 149) のだと言われている。

このように見てくると、この遺稿が解明を目指していた〈懐疑〉は本来たんなる認識の問題ではあり得なかったはずで、スチュアートのように、第二部第一章第一節のみの分析をもって、『精神現象学』の「感覚的確信」の分析がキルケゴールの「反復概念の認識論的基盤」であるとし、そこにキルケゴールの〈反復〉概念の源泉を見ようとするのは一面的にすぎる解釈と言えよう。遺稿の全体構想からすれば、「感覚的確信」の分析は議論の導入部分において参照されるに留まり、そこで遺稿が中断しているのだという事実は等閑視されてはならぬであろう。すでに述べたように、遺稿本文は「意識における反復、したがって想起」を論じはじめたところで中断されたのであるが、しかし前節で触れたところからも明らかなように、キルケゴールにおいてその〈想起〉は、一面において認識論的問題でもあるが、はじめからそれには留まり得ない問題としても捉えられていたことは、すでに見た『あれか――これか』の「最も不幸な者」論にも明らかであるし、〈想起〉に関する最初の本格的言及とされる日誌記述 (Pap. III A 5, 1840. 7. 10) においてすでに、〈想起〉はプラトンにふれて語られながらも、同時に人間の実存そのものにかかわる問題としても捉えられていることでも明らかである。[37] その〈想起〉との密接なかかわりにおいて〈反復〉が捉えられていることを考えれば、[38]〈反復〉もまた本来たんなる認識論的概念には留まり得ないものであったと見るべきであろう。

以上の問題点にも深くかかわることであるが、スチュアートによる遺稿の分析・解釈には、なおもう一つ重要な点が見落とされている。それは彼が分析の対象とした遺稿第二部第一章第一節でも厳しく遂行されている〈意識 Bevidsthed〉と〈反省 Reflexion〉との峻別の等閑視である。先述のように、意識において実在性と観念性とが触れ合うところに矛盾が生じ、そこに懐疑の可能性は胚胎する。しかしその二重性が相互に衝突することも抵触することもなく交

流しあっているかぎりは、本来的には意識は現にあるとは言えず、「意識はその可能性においてあるに過ぎない」(Pap. IV B 1, s. 147) とされる。意識は矛盾を本質とし形式とする関係であるが、意識がその矛盾を発見するのはそこに衝突が生じるときである。「意識はもともとこの衝突と、それによって規定される矛盾との表現である」(Pap. IV B 14, 8)。そしてその矛盾こそが「意識の生成」であり、「生成の最初の痛み」(Pap. IV B 14, 9) である。「意識はまさに衝突によって生じ、いわば衝突を前提する」(Pap. IV B 1, s. 149)。そこではじめて意識はその現実性において現われるとされる。

そしてここで〈意識〉と〈反省〉とが厳しく峻別される。〈反省〉の規定はつねに二肢的 dichotomisk であって、そこにおいては二者は未だ関係が可能になる仕方で相互に触れ合っているに留まる。「矛盾もなく、たんに相互の関係にあるだけの観念性と実在性は、純なる二肢性 Dichotomier を与える」(Pap. IV B 10, 5)。そこでは意識もその可能性においてあるにすぎず、両者の関係もまた可能性においてあるにすぎない。それに対し〈意識〉の規定は三肢的 trichotomisk であり、そのような意識においてはじめて関係はその現実性においてあらわになる。反省は関係の可能性にすぎず、したがって「反省は無関心的である。それに対し意識は関係であり、また関心である」(Pap. IV B 1, s. 148)。「あいだに—ある存在 inter-esse」であると同時に、そのことに「無限の関心 interesse」を懐く〈関心性〉である。かかる無限の関心性でもあるような関係においてはじめて、矛盾は矛盾として激発する。そこに真の衝突が生まれ、その衝突において意識も関心もその現実性においてあらわになる。「反省は関係の可能性であるが、意識はその関係の最初の形式が矛盾であるような関係である」(ibid., s. 147)[39]。

観念性と実在性とを互いに永遠に対立させたとしても、その対立に無限の関心を懐く意識が存しなければ、真に〈懐

疑〉は存在しない。二者のたんなる対立だけではなく、その対立に無限の関心を懐く意識において矛盾が矛盾として激発するところではじめて、懐疑も真にそのあらわな姿を見せると言えよう。「懐疑がたんなる思惟と異なるのは、そこにはたらく関心によってである」(Pap. IV B 13, 20)。可能性としての関係にすぎない二肢的な〈反省〉においてではなく、現実性としての関係である〈意識〉の三肢性においてそれは真に生起する。まさにこの点を洞察したからこそ、ギリシャの懐疑家たちはエポケーによって関心をアパテイアに変じることで、懐疑を廃棄せんとしたのである。ただしそのように関心が廃棄されることによっては、懐疑は克服されるのではなく中性化されるにすぎない。しかし無関心的な客観的(数学的、美学的、形而上学的)思惟によって、もしくは体系によって懐疑を克服せんとするのは、懐疑の何たるかやその理念的可能性に対する無知を露呈している。懐疑は関心の内にこそ存するのに、無関心的な客観的思惟や体系的認識によって懐疑の克服を図ろうとする近時の哲学よりは、その点でギリシャの懐疑家たちの懐疑の理解のほうがはるかに透徹していたとされるのである。

このように二肢的〈反省〉と峻別される〈意識〉の捉え方、「意識は精神であり、そして注目すべきは、精神の世界においては一は分けられると三になるのであって、決して二にはならないことである」(Pap. IV B 1, s. 148, jf. Pap. IV B 10, 12)と意識の〈三肢性〉が強調され、また意識は「あいだに—ある存在」としての〈関係〉であると同時に、そのことに無限の関心を懐く〈関心性〉でもあるとするところなどは、のちに〈実存〉や〈精神〉の構造として捉えられるものを予示しており、こうした〈意識〉の捉え方は、少なくともヘーゲルの「感覚的確信」の節で言われる〈意識〉とは隔たるものであろう。まさにそのこととかかわって、前引註で『精神現象学』を思わせる感性的意識、知覚的意識、悟性を引き合いに出しながら、近時の哲学の用語の紛らわしさを咎めて、「意識にはそれ以上のものがある」

(Pap. IV B 1, s. 147) とするところを見ても、遺稿本文で言われる〈意識〉は、少なくともヘーゲルの「感覚的確信」の節での〈意識〉とは異質な契機をはらむものと言わなければならないであろう。[40] こうした点でも、未完遺稿の第二部第一章第一節のみの分析をもって、『精神現象学』の「感覚的確信」の分析にキルケゴールの〈反復〉概念の源泉を求めることは、遺稿の解釈として一面的にすぎるとともに、遺稿の構想に本来すでにはらまれていた契機も、その遺稿の目指したものも、ともに見落とされて行くことにならざるを得ないであろう。

註

キルケゴールからの引用は、本文中に略符号で示した。今後決定版となる新版全集もなお刊行途上にあり、本論で取り上げるハイベア駁論もヨハンネス・クリマクス遺稿も未だ刊行を見ておらず、また先行研究の引用はほとんど従来の全集、遺稿集に拠っている現状に鑑み、煩をいとわず可能なかぎり両方を指示することとした。SKS は新版全集、SKS K は新版全集註釈巻、SV は原典全集第二版、Pap. は遺稿集第二版に拠る。

(1) 『反復』の後半部の核をなす書簡の筆者たる青年についても、コンスタンティン自身「私がつくり出したあの青年」(SKS 4, 93; SV III 290) と明言するように、青年もまた彼の創作した産物にほかならぬことが強調される。

(2) 『不安の概念』緒言の長い註における『反復』への言及 (SKS 4, 325ff.; SV IV 321ff.) も参照。

(3) 後述のごとく、レギーネの婚約の報に接した直後に、キルケゴールは二月十七日付の青年の書簡に続く一〇頁を原草稿から破棄し、後続部分を全面的に書き改めた。その書簡に続くコンスタンティンの註釈 (SKS 4, 83-86; SV III 278-281) には女性軽侮の言が目立つが (このコンスタンティンの姿勢は『人生行路の諸段階』第一部のコンスタンティンの演説に引き継がれる)、そのなかにもレギーネの言動を仄めかすものが窺える。しかし現テキストは改稿の結果であり、もとの草稿に遡るといっそう激しい侮蔑的表現が見られる。たとえばその註釈の第二段落の末尾 (SKS 4, 83; SV III 279) には次の文章が続いていたが、のちに抹消された。「娘が生命を賭そうとした恋を諦めたときほど、新たな恋に陥りやすいときはない。彼女の腕に一人の男を抱かせてやれば、まるで小間物屋で買ったもののように、その男を受け入れる」(Pap. IV B 97, 13)。これがレギーネの婚約の報に接した直後の文章で、それがのちに削除され

て現テキストとなったことを思えば、そこには間接伝達の問題としてだけではとても片づけられない問題がふくまれていよう。

(4) E. Hirsch, Kierkegaard Studien I–II, 1930-33 (1978), Bd. I, S. 255ff.

(5) Breve og Aktstykker vedrørende SK., udg. af Niels Thulstrup, 1953, bd. I, s. 120.

(6) F. J. B. Jansen, S. K. Værket i Udvalg IV, Indledninger og Tekstforklaringer, 1950, s. 117ff.

なお両草稿のあいだの紙質紙型の相違については、後出(註八)のH・ブリッカーによる解題(SKS K4, 8ff.)のなかに、精細な報告がある。その第一部の用紙は、キルケゴールが通常用いていたのとは異なる紙質紙型であるとされる。Cf. A. McKinnon and N. J. Cappelørn, The Period of Composition of Ks. Published Works, in: Kierkegaardiana IX, 1974, p. 142, n. 14.

(7) 両者の推定の相違は一つには、青年の〈死〉の出来事が、ヒルシュでは青年の第七信のあとの時点に比定されるのに対し、ヤンセンではそれが第一部を締め括るはずであったとされる点である。ヤンセンの推定に対する反論としては、A. Henriksen, Ks. Romaner, 1954, s. 126ff.、ヒルシュの推定に対する批判としては、D. Borso, A Myth of Repetition, in: Kierkegaardiana 18, 1996, pp. 44ff.など参照。

(8) H. Blicher, Tilblivelsehistorie, in: Gjentagelsen. Tekstredegørelse, SKS K4, 12–28.

(9) H・ブリッカーはこれの傍証として「私の旅行の予定は一年半だった」(Pap. X/5 A 149, 20)を引証するが(ibid. s. 14 fn.)、これは初回のベルリン滞在に関する記述であり、錯誤を招く。しかし後出の五月十五日付ベーセン宛書簡の書きぶりなどを見れば、当初ある程度長期の滞在も考慮されていたと推測することはできよう。

(10) H. Blicher, ibid., s. 15. Cf. D. Borso, ibid., p. 46, p. 47 n. 11.

(11) 盲人の竪琴弾きはSKS 4, 44; SV III 234に、独身主義者だった薬局の主人はSKS 4, 28; SV III 215に定着されている。

(12) Breve og Aktstykker, bd I, s. 118.

(13) Ibid.

(14) ちなみに一八四二年の懺悔祈禱日は四月二十日であった。Jf. SKS K4, 19.

(15) 草稿には「一八四三年七月」(Pap. IV 97, 30)とあったが、改稿された。後述参照。

(16) 第一部末尾のコンスタンティンのコペンハーゲン帰着後の出来事は一見それと両立しないが、必ずしも矛盾するわけではない(Jf. H. Blicher, ibid., s. 20.)。

(17) 一八四三年六月十五日付Berlingske Tidende紙に、こ

の『Staffeldt 全詩集』の刊行が広告されている (jf. Pap. IV A 118 fn.)。D・ボルソはこれをもって刊行日と同定して、したがって青年の第一信はそれ以降に書かれたと断定する。D. Borso, ibid., p. 45. しかしH・ブリッカーはその断定には疑念を投じ、ハイベアの評論などから、それがキルケゴールのベルリンへの出発前に刊行されていた可能性も捨て切れないとする (H. Blicher, ibid., s. 22.)。しかし『反復』における引用と、NBと註記された日誌記述における引用との先後関係では、日誌記述を先と見るのが妥当であり、そしてキルケゴールがそれを日誌に書き留めたのは帰国後であるとするのが妥当であろう。

(18) G・マランツクをはじめとして、わが国の代表的研究者たちも、『反復』から『おそれとおののき』へと思想的発展を見るのが支配的である。Jf. G. Malantschuk, Dialektik og Eksistens hos SK., 1967, s. 232. W. Greve, Ks. maieutische Ethik. Von »Entweder/Oder II« zu den »Stadien«, 1990, S. 144.大谷愛人『キルケゴール著作活動の研究（後編）』一九九一年、八九四―一〇〇九頁。そのことには妥当性があるが、しかし以上のように『反復』の第二部が『おそれとおののき』後に成立したとする推定が可能となれば、第二部のヨブの境涯とアブラハムの境涯との関係はさらに検討されなければならないであろう。たとえばD・ボルソは、両者をヒルシュの言うalternativeというよりむしろmirrorの関係にあるとしている (Jf. D. Borso, ibid.)。とはいえ、ヤンセンの言うごとくに、原草稿でヨブの境涯がそのまま青年の再生・再結合と契合していたとはとても考えにくいことは、アブラハムの境涯がそのままキルケゴールの立場ではないというのと同じであって、その点においてはヒルシュの解釈に妥当性があると思われる。

(19) E. Hirsch, ibid., S. 261ff.

(20) しかしたとえばヴィルヘルムがGjentagelse（反復）をVane（習慣）と峻別するところ（SKS 3, 127; SV II 139）は、ある面では『不安の概念』におけるGjentagelseとVaneとの峻別（SKS 4, 448; SV IV 458）を先取りしている。E・F・ムーニーになるとさらに、「人格の陶冶における美的なものと倫理的なものとの均衡」論でヴィルヘルムが、〈倫理的なもの〉は〈美的なもの〉を完全に打ち砕くが、しかしその絶望は次の瞬間には〈変貌 Metamorphose〉として現われるとして、「すべてが再帰する (komme igjen)、ただし変容して (forklaret) である」(SKS 3, 258; SV II 293) と述べるところを引いて、これが「キルケゴールの〈反復〉概念の早期の表現である」とする (E. F. Mooney, K. on Self-Choice and Self-Reflection: Judge William's Admonition. In: R. L. Perkins (ed.), International K. Commentary. Eithor/Or, Part II, 1995, pp. 11-12.)。しかしこれが『反復』で「新しいカテゴリー」とされるような

〈反復〉であるかは疑問である。

(21) Pap. IV B 108-124. 桝田啓三郎訳『キルケゴール全集』第六巻、筑摩書房、一九七五年に、付録としてその邦訳が収められている。

(22) Pap. IV B 117, s. 280ff.

(23) B・ヤンセンも、コンスタンティンはこういう表現によって、判事ヴィルヘルムにきわめて近い人生態度を言い換えているとしている（B. Jansen, ibid., s. 116）。ただしもちろんコンスタンティンのイロニー的立場は、ヴィルヘルムとは対照的ですらある。

(24) G. Malantschuk, ibid., s. 215.

(25) 「最も不幸な者」論において不幸な者の一人としてヨブが引かれるが、そこでヨブは「彼はすべてを失った。しかし彼はすべてを所有していたのだった」（SKS 2, 221; SV I 232）として、いわば過去において現在的である「不幸な者」の一例とされる。

(26) Jf. J. Garff, "Den Søvnløse." K. læst æstetisk/biografisk, 1995, s. 122ff., sær. s. 125.

(27) Vgl. E. Hirsch, ibid., S. 255f.

(28) この批評の背後には、後述する〈意識〉の〈二肢性〉の主張がある。

(29) 前節で述べたように、「不幸な意識」の定義に関しても、『精神現象学』の〈不幸な意識〉の分析を下敷きにしつつ、議論が展開されている。

(30) J. Stewart, Hegel als Quelle für Ks. Wiederholungsbegriff, in: Kierkegaard Studies. Yearbook, 1998, S. 302-317.

(31) Ibid., S. 313.

(32) G. W. F. Hegel, Phänomenologie des Geistes, Werke (Suhrkamp), Bd. 3, 1970, S. 91f.

(33) Ibid., S. 77f.

(34) J. Stewart, ibid., S. 316.

(35) Ibid., S. 317.

(36) ヨハンネス・クリマクス遺稿の本文全体の構成については、

拙論「ヨハンネス・クリマクス遺稿をめぐって（二）」『キヨルケゴール研究』第二二号、一九九一年、五一一三頁、参照。

なおこの第二部第一章第一節の中途で、この遺稿は中断される。

(37) G. Malantschuk, Begrebet Erindring og dets Aspekter i SKs. Forfatterskab, in: Frihed og Eksistens, 1980, s. 128f.

(38) 遺稿本文の終わりで、前引のように「意識における反復、したがって想起」と言い換えられることでも明らかなように、この時点までの遺稿本文の議論においては、未だ〈反

復〉と〈想起〉とは峻別されておらず、主として認識論的地平において、〈想起〉は〈反復〉に包摂されるものとして捉えられているように思われる。

(39) 私見によれば、この未完遺稿は、当時デンマークにおいて烈しく争われていた〈矛盾律論争〉にかかわって書かれた。そしてここに現われるキルケゴールの〈矛盾〉の捉え方こそ、その論争にかかわりつつ彼が提示せんとした立場に深く繋がっている。これらについては、

拙論「キルケゴールにおける〈論理的問題〉」『基督教学研究』第十四号、一九九三年、一―三八頁、参照。

(40) H・ファーレンバッハも、キルケゴールはここで明らかに意識と自己意識と精神とを等値しており(vgl. Pap. IV B 1, s. 148)、それは『死に至る病』の規定にも結びつくものであるとし、こうした(フィヒテ的)意識概念から、キルケゴールはヘーゲルを論難し、感性的意識や知覚的意識がすでに意識とされることを誤まりとし、意識にはそれ以上のもの、すなわち自己規定があるのだとしているとして、ヘーゲル的意識概念との相違を指摘する。H. Fahrenbach, Ks. existenzdialektische Ethik, 1968, S. 25f.